特定非営利活動法人 道普請人 理事
福林 良典 さん

「土のう工法」駆使して 農村部の道づくり支援

私たち「道普請人」は、主にアジア・大洋州・アフリカの農村の人々に「自分たちの道は自分たちで直す」という意識を広めようと、土のう工法を用いた道路整備に取り組んでいます。土のう工法とは、穀物や肥料、セメントなどの袋に土を入れて土のうを作り、路盤に並べて突き固めたうえで、表面に土を被せてならす道路整備の手法です。現地で調達できる材料を使い、重機がなくても簡単な道具さえあれば人力で工事ができるのが最大の利点で、地域住民が自ら工夫しながら主体的に参画できる「住民参加型」プロジェクトという点も大きな特長です。京都大学工学部の木村亮教授（道普請人理事長）が提唱する〝日本発〟のユニークな工法として、開発途上国で普及が進んでいます。

公共性の高い社会インフラ整備の仕事に就きたいと、大学・大学院で土木工学を専攻し、ゼネコンに就職して国内の高速道路案件などに6年間従事しました。最初から国際協力の道に進もうと思っていたわけではなく、大学院の博士課程に戻った時、指導教官の木村教授から「土のう工法による開発途上国の道直し支援」というテーマを示され、ぜひ取り組んでみたいと思いました。

初めてパプアニューギニアやケニアの現場に出た時は、それこそ無我夢中でした。どの国でも人々は土のう工法の意味を理解できず、「こんな袋を使って何ができるんだ？」という反応ですが、短い距離でも実際にやって見せて、デコボコ道が人力で整備できるのが分かると、ようやく興味を示してくれます。現場では何よりも人々のやる気を引き出すのが肝心で、時には忍耐が求められます。現場で心掛けているのは、その土地を良く知っているのは住民であり、例えば降雨時の水の流れ方を尋ねるなど常に対話しながら進めること。そして、単純な工法だけに手順を守って、雑な作業をしないよう徹底することです。途上国の農村部では道路の大半が舗装されておらず、雨季には水浸しで通れなくなるケースが少なくありません。農作業や市場、学校に通う道を自分たちの手で整備することで、生活が便利になることを実感し、さらに技術を習得して自信を身に付けた様子を見ると、私自身も手応え以上のものを感じます。

ケニアやエチオピア政府は、現地の資材を活用した農村部の道路整備を行政の指針に掲げており、それを具体化する手法として、土のう工法が期待されています。地域貢献につながる共同作業を通じて住民の融和を促す効果もあり、東ティモールやウガンダ北部、フィリピン・ミンダナオ島など紛争経験国・地域の平和構築支援の文脈での需要も高まっています。他方、私たちは土のう工法だけでなく、途上国の道路整備のためのより良い方法を模索し、知見とノウハウを蓄積するよう努めています。現地の人々と一緒に汗を流し、地域の生活改善、生計向上につながる〝未来への道〟を切り開いていきたいと思います。

Profile 〈Fukubayashi Yoshinori〉

1973年生まれ。京都大学工学部（交通土木工学科）卒業、同大学院工学研究科（土木システム工学）修士課程修了。準大手ゼネコンに6年間勤務した後、同大学院で都市環境工学博士課程修了。2007年の（特活）道普請人設立に参画し、理事に就任。パプアニューギニア、ケニア、タンザニア、フィリピン、東ティモールなどで土のう工法による道路整備・農村開発に取り組む

道普請人によるウガンダでの土のう工法指導▶